




ふたなり化魔目で
ガク戦闘力になり
敗北服従変態墜ち



違法魔術や魔具の取り締まりのプロフェッショナルなたちの集団
魔警察のナンバーワン魔警、「火涼」は
あらゆる魔術錠を解除し、数々の古代魔具を盗み出してきた
A級手配の女盗賊魔術師、通称「鍵刺し」を
激しい戦闘の末に追い詰めていた

「はあはあ…もう貴様に打つ手はない！
盗み出した古代魔具を差し出して投降しろ！」

ガッ！

「くそっ！なんて奴！今までかき集めた強力な魔具を
全部使って攻撃したのに…！
くっ…こうなったら背に腹は代えられないわね…」



「これでどうだ!」

「くっ、しまった! 転送魔術か!
これはまさか例の古代魔具か!」

「正解よ! 手に入れたてで効果も把握できてない
古代魔具だけど一か八かよ!
その魔具には付けた者の魔力と動きを
完全に封じる力があるらしい...という話よ!」

「なんだと!」

ガ

チッ!



「…ん？何も身体に異常は感じない…
普通に魔術も使えそうだぞ？」

「な、なに!？」

「残念だったな!
情報がガセだったか偽物でも掴んでしまったのか
いずれにせよこれで貴様の命運は尽きた!
大人しく投降し…!」



「ほお!!」

「うえり!!、股間から何か生えてきている!!
まさかこれが古代魔具の作用なの?」



ビュッ♡

「おっす!!!」



ほろろっ

「な、なんだこれは?! わ、私の股間に…!」

「ち、ちんぽが生えてる…?!
下着みたいな形で妙な魔具だとは思ってたけど…
これって本当はただの悪ふざけ用の道具なんじゃ?!」



「よ、よくもこんなモノを…！覚悟しろ！」

キッ!

「ま、まずいっ！くそっ！最悪！
まさかこのあたしがガセネタ掴むなんて！」



「っ……んぐ……くち……!」

ハア…
ハア…

「ん?どうやら股間が気になって
上手く動けないみたいね!でも
いくらいきなりちんぼ生えたらからって
そんなに邪魔になる?」

「うるさいっ……!くっこの股間のモノ……違和感がある上に
敏感でどうしても動く時に意識してしまっ……っ!」

もじもじ…



「だが上手く動けなくとも魔術で……って……え？
ま、魔力が上手く練れない？
体内の魔力循環が股間に集中してる……
まさか股間の玉に魔力が集められてるのか！」

「ぶっ！あははは！魔力を封じるってそういうことね！
思ってたのとは違うけど聞いてた話は本当だったみたいね！」

パチッ

パチッ

ピク
ピク



「だが何とかこの玉から魔力を取り出せれば魔術が使えるはず…
ぬぐ…玉に溜められた魔力を何とか引き上げて…!」

「あはは! ちんぽ勃起してきてる! そんなみっともない
身体になったんだからもう無駄なことはやめなさいよ!」

「魔力が圧縮されるこの感覚…いける! 魔術が放てるぞ!」

「う、うそ?! やっぱちんぽ生えるだけの
しょうもない魔道具なの?!」

「今更後悔しても遅い! くらえ!」



ピッ
ビクッ!
ビクッ♡

ムクッ♡
ムク♡

「わ、わたひの魔力がちんぼの汁に…しょ…しょ…しょんなバカな…」

「さーて戦えなくなったみたいだし
とりあえずこのちんぼ女を魔具ごと
持ち帰って…」

ハァ…♡

ハァ…♡

ヒュッ♡

「火涼さんがいたぞ！交戦しているようだ！」

「ちっ！別のやつらが来ちゃったか！

せっかくの魔具は惜しいけど…ここは逃げるしかないわね！」

「ま、待へえ……」



「くそっ……！ 鍵刺しめ……！
よくもこんな身体に……っ！
絶対に探し出してこのふざけた魔具を
外させてやる……！」

よた

よた



「あ、ナンバー1だったのにちんぽ生やされてよわよわになっちゃった火涼ちゃんじゃーん♪」

「着けられた魔具が身体を覆い隠すものを弾いちやうせいでスーツは極薄のしか着れないし股間は丸出しのままなんだって？
そんな下品な姿で歩き回れるなんて流石の図太さだわ」

「ふん…股間の物が不愉快な上にここぞとばかりに低レベルな連中が絡んでくるのもこの体の面倒な所だな…」



「はぁ？だれが低レベルだって？」

「おまえたちに決まっているだろう
普段から陰でヨソヨソと私のことを気に入らないと
言っていたことぐらいは知っている
僻んでくる連中の陰口なんてキリが
ないから相手にもしてなかったがな」



「この…!こんなもん丸出しでうるついでる女が偉そうな
口利いてんじゃねえよ!」

「あぎい!き、金玉握るなあ!」

「あんたが天辺に居座って依頼をこなしまくるせいで
こっちに雑魚魔物の掃除くらいしか仕事
回ってこなかったんだから
文句ぐらい言われて当然でしょ!」

「あーほんと目の上のタンコブが
いなくなってせいせいするわ!」

クッ!

ズル!

「あ、謝る!わ、私が悪かった!
悪かったから離してくれえええ!」



「なに？あっさり謝っちゃってプライドとかかないの？
鼻水まで垂らして必死じゃない！その情けない姿に免じて
離してあげる！」

「あひい〜はひい〜……………」

「あはははは！なにこいつ勃起してんだけど！
火涼ってマゾだったの？」

「そういえば、男って金玉握られたりすると子孫残せなくなる！
って思って本能的に勃起してきちゃうって聞いたことがあるな！」

「何それ！オスの本能が働いちゃうっての？」

「あははははは！脳みその中にまでちんぽが付いちゃうってじゃん！」



「ねえ、金玉握ってこんだけいい反応するんだったら
射精させてみたらどんな反応するか気にならない？」

「あははは！いいね〜それ！」

「は、はひっ！？！こんな所で射精なんてできるわけ……！」

ビクッ！

グッ！



「うるせー! あんたみたいになちんぼ露出女が普通に
出歩く許可が出てる段階でおかしいんだよ!」

「上層部もあんたを切り捨てるのがもったいないから
甘い対応してるんでしょうけど
こっちはちんぼ生えた女にうるうるされて
目障りなの! オモチャにされるぐらい当然だろ!」

「んおっ!! やめろ! ち、ちんぼを擦るなあっ!」

ズルッ♡ ズルッ♡



「ほーらちんぽゴシゴシ♥ちんぽ女の火涼ちゃん
オスの性欲を刺激されるのはどうかな〜？」

「んおっ♥や、やめっ…♥
おっ♥おお〜♥」

「あはははは♥めちゃくちや感じてるじゃんキモッ♥
金玉ピンチになったせいで精子出したくって
しょうがないんだ♥」



ズリ♥ズリ♥

「女の子の膣内じゃなくて手で抜き出されてる
無駄撃ち精子だけだね♪
さーてあんまり長引かせると他の人がきちやうかもだし
フィニッシュさせちゃおうかな！」

「んおおおおおお!!ちんぽ抜き加速したり!!
手の動きに合わせて金玉が
精子送り出してくるうっ♡」

「お、射精するかな?ザーメンぶちまけるちんぽ女!!」

「射精る!射精るうっ!!♡」

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ



「おほお〜………♡んおっ………♡」
ほお〜♡

「あはは何その顔！
あの火涼がちんぽ生やされた上に
こんなアホ面晒すなんて最高ね！」

「私たちはそろそろ任務の時間だから
その床とか壁に付いたドロドロのきったないちんぽ汁は
自分で掃除しといてね〜♪」

「ほお〜♡おほお〜………♡」

ピュ♡



「ズル…ズル…」

ハア…
ハア…

「くっ…この身体でも魔粘泥ぐらいは倒せるはずだと思ったが
ここまで手こずるとは…
しかしいくらなんでも最下級の魔物ぐらいは討伐出来るはず…
戦闘の勘が鈍らない様に少しでも現場に出なければ…！」



「ズッ！」

「なに？木の上からも降ってきた！
しまった！一匹に時間をかけ過ぎて
他のやつが寄ってきてしまったのか！」

ホッ！
ホッ！



「うっ、まずい足を取られた！
し、しかも…ちんぽにまで取りついてきた！
だが…魔粘泥は魔力器官の多い顔に
取りつくことが多いはず…
何故真っ先にちんぽに
寄ってきているんだ！」



「おおお！粘泥がちんぽの先を
まさぐり始めた！
ま、まさか私の金玉に溜まった
魔力に惹かれてちんぽに
取りついたのでか！」



「んひっ、んひっ、他の魔粘泥が
最初のやつとくっついてデカくなって
んぐうお...グニュグニュした
感触が気持ちよすぎて
肉竿ピンピンにおっ勃てて
粘泥の良い様に扱われてしまうっ！」

ズッ♡

ズニユ♡



「おっ♡金玉持ち上がったってきた♡
射精る！粘泥の塊にザーメン射精るう！っ♡
魔力たっぷりの金玉ミルクを
雑魚魔物に無理矢理給餌させられるうっ！」





「んほおおおおおおおおおおおおおおお!!♡
魔物の中に射精いいいいいい♡
溜め込んだ魔力ザーメンを低級モンスター如きにあっさり食べられちゃってるううううう♡」



「はひい〜♡はひい〜♡
こいつら精液まで残さず取り込んでいる…っ
私の精子まで粘泥のタンパク源に
されてるなんて…っ!♡
でも、ようやくちんぽから離れたっ…
は、早く足元の奴らを振り払って脱出を…」

んぐんぐん



「おおお！いつの間にかこんな数の魔粘泥が…！
も、もしかしてこいつら全部
私の精液をエサにする気で集まってきたのか！」

ズル…

ズツ…

「おっ♡もう射精るっ!♡
一刻も早く食事でありつこうとする
食欲な精液搾りで一発射精済みの
敏感ちゃんぽ速攻射精しちゃうっ!
イぐっ♡イぐうううっうう!♡」

ズッ!♡

ズニユ!♡

ズッ!♡



「おほおほおほおほおほおほ!!
二回目のザーメン配膳なのに
大盛り射精るっっっ♡
全身の粘泥のプルプルボディに
濃厚白濁液で
ねっちより感追加ああっ♡」

ん
ぽ
ぽ

ウウウ♡

ホ
プ
ウウウ!!♡





「ひっひっ！イってる！イってるのにまだちんぽ
こねこねされてりゅううううう！！
全身の粘泥にエサザーメン行き渡るまで休みなしの
ちんぽ給仕っ！金玉ミルクサーバー強制稼働で
おかしくなるうううううう！！」

ちんぽ
♡

ちんぽ
♡

「……………は…あ…
はひっ……………っ♡
ち、ちんぽも金玉もしなしになんて
やっとなかなくなつたあ……………
自分のちんぽ汁と粘液で身体もみくちゃにされて
雑魚魔物に完全敗北……………
こ、こんな様じゃ古代魔具の
取り締まりはおろか最低ランクの
討伐任務すらこなせないい……………」



ど

ホ…ホ…♡

「お前がある筋では有名だという魔女か
なんでも性に関するあらゆる薬を調合することが可能だとか」

「ひひひ確かにそうさ流石にいきなり丸出しで
現れたのはあんたが初めてだけどね
かなり厄介な呪いをかけられてるようだね」

「話が早くて助かる！
お前の薬でこの男性器を取り去ることはできないか!!」

「すまないがそれはおそろしく無理さね
薬を飲んだ瞬間はちんぽがなくなると思うが
その魔具を着けている限り
すぐにまた同じ物が生えてきちゃうだろうね」

「くっ…!やはりダメか…!」



「見たところあんたの悩みどころはちんぽが生えてるのも
そうだが、そのちんぽと金玉が勝手に魔力を使って
精虫を作っちまってるってこともあるんじゃないかい？
そっちを何とかする薬なら作れるかもしれないよ」

「なに！本当か！」

「まあね。余計な詮索をする気はないが
そんな魔具を引っ付けてるってことは
なにか面倒な事に関わってるんだろ？
ならその金玉に溜まっちまってる魔力を
使えるようになりたいんじゃないかと思ってね」

「ああ！ぜひ頼む！」

「あい分かったよ。それじゃ…」



「ほい！ちんぽおっ勃ててそいつに射精しな」

「…は？な、なんで…？」

「なんでって調合に使うに決まってるだろう
その呪いで生えたマラには普段使う材料だけじゃ
効きそうにないからね
あんた自身の種汁を触媒に何種類かの材料の組み合わせを
試していくのさ」

「なりほ、他の材料でなんとか代用とかは…」



「何言ってるんだい！調合なめるんじゃないよ！こっちは50年以上ちんぼの薬を作ってきた経験から最適な方法を弾き出してるんだ！文句があんなら帰んな！」

「くっ！わ、分かった！今更それぐらいことやってやる！」

「そうそう年寄りの言っことは素直に聞いとくもんだよ」

グッ♡



「ん…？なかなか勃たないね。若いのにどうしたんだい！」

「いきなり言われた上にアンタがずっと見てるんだ！
そんなに簡単に勃つか！」

ハァ
ハァ

「まったくちょっと見られてるからで
最近の若いのは情けないねえ…しょうがない
それじゃあ…」

スコ♡
スコ♡



「ほれ！こいつを飲みな！」

「むぐらっ！な、なんらこれは！」

「いいから飲み込みな！すぐに分かるよ！」



「ひいひい！な、なんだ!!
き、急にちんぽがバキバキに硬くなってきた!!」

「アタシの特製精力剤さね。これを飲めば
どんなへにゃチンでも金棒みたいにカッチカチ
ちんぽ汁出すことしか考えられない
獣になるって代物さ
しかもそれだけ強力でも一発出したら
ちやあんとスッキリできるようになってるから安心しな」



「はあ！はああああ！♥は、早く出したい！
金玉に溜まったオス汁全部出したい！♥
ガンガン凶暴なガチ抜きでっ！
ちんぽからびゅぐびゅぐ
ザーメンぶちまけたいいいいいいい！！♥」

「そうそうちんぽ抜くときゃそうじゃなきゃね
あたしや軟弱なちんぽ抜きする男が嫌い…
ってあんたは女だったね、まあいいさね
とにかく出すもん射精しちまいな」

「おおおおおお！！もう精液上ってきた！
射精る！オス性欲ギンギンのエキス射精るう！♥」

ゴッスゴッス

ゴッスゴッス



「んぐおっほおおおおおおおっおお!!♡
せーしびゆるびゆるきもちい〜~~~~♡
桶いっぱいにくっさいちんぽミルク射精るうう♡」

「ひっひっひ、ちんぽおっ勃てるだけで
もたついてた割にはいい勢いの射精だ
やりやできるじゃないか」



「あひゃーあひゃー♡」

「あしよしちゅっどととらしをちんこしてみな
あちんこしを挿れっ…」

あひゃー♡



「よし出来た！まずはそいつをグイっといっってみな！」

「はへ？精液を材料にするとは言っただけじゃが
これって精液に薬草の粉を混ぜただけじゃ…
もっところ丸薬にするとか…
飲みやすくする加工は…」

「…」

「ク」

「ほとんど」から作るんだ！いちいちそんなことしてたら
いつまで経っても終わらやしないよ！
ほら、さっさと飲みな！」



「くっっ！……分かった！飲めばいいんだな！
ぐっ！うぶっ！ゴグッ！ゴグッ！」

「ひっひっひ、肚が決まったようだね
なかなかいい飲みっぷりじゃないか」

ゴクッ！
ゴクッ！

「うっ……ごぶっ！喉に絡みついてくる上に
ニオイが鼻の中いっぱいに広がって……っ！
ゴボっ！んぐぶっ！」



「んぐっ……ぶはあ!!はあはあ……!!
の……飲んだぞ!」

「何か身体に変化はあるかい?」

「うぶっ!……喉や口の中、それに腹の中にまで
へばりつくような不快感はあるが……
身体的な変化は……特にないな……」

「……ふむ少し待っても特に反応はないね
じゃあ次はこの組み合わせだ」



「うぐっ…！くそっ！ヨグッ！ヨグッ！」

「おおそうだ、精液が足りなくなったらまた射精して補充してから飲んでもらうからねそうさね…あと10通りぐらいは試すよ」

ゴグッ！

ゴグッ

ゴグッ！♡

「んぐっっ！んん…っんぐっっ！んぐっっ！んぐっっ！んぐっっ！」



「ついに追い詰めたぞ！今度こそ貴様を捕らえ
この魔具を外す方法を吐いてもらおうぞ！」

「う、ウソでしょ！魔具が着いたままで…
なんで魔力が使えるようになってるのよ！」

ガッ



「あの魔女が作ったのは回復薬と精力減退薬を組み合わせた物だったが…精液を抜ききってから飲むことで射精後の体力を回復しつつ魔力を奪う機能を封じるのに成功した！」

だが効果は長く持たない上に副作用も確認できてないと
言っていた早急に決着を着けなければ！」

「くっ！油断したわ！けどね、その魔具を着けてる限り
あんたに勝ち目はないのよ！」



「な!! 魔具が膨れ上がった!!」

「古文書を探ってその魔具の
真の機能を突き止めてやったの!
装着者にちんぽを生やしてその魔力を
精液に変換するだけじゃなく
魔力を注ぐことで自由自在に変形するのよ!」

「な、なんだと?!」



「くっ！う、動けない！
まさかこんなことまで可能な魔具だったなんて…！」

「あはははほーちんぼと顔だけ出でて最高に滑稽ね！
良い様だわーちんぼが生えても頑張つてあたしを捕まえようと
したけど残念でした♡」



「それじゃ下手に暴れられても困るし
魔力精液を搾りきって完全に抵抗できなくしてから
奴隷にしてあげようかな♡」

「な?」

「さーてちんぽ扱きにはどんな形が良いかな…」



「こんなかんじでどうかかな?♡
ちんぽリングを動かして金玉ミルク搾り出してやるわ♡」

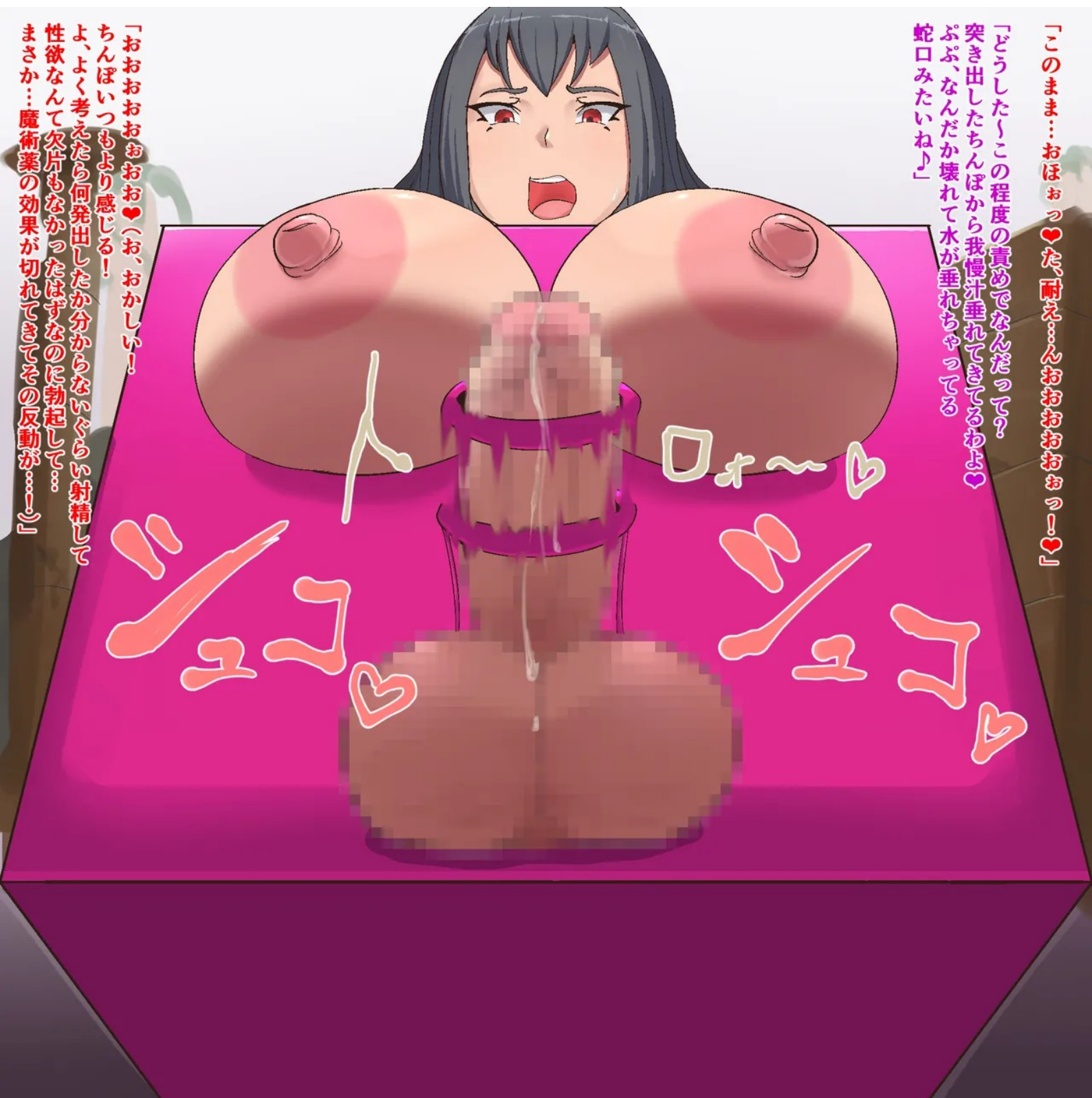


「んっ…ふん!こんな程度の責めで射精なんかしない!
(普段ならあつという間にちんぽに脳が支配されてしまうが…
ここに来るまでに精液は抜ききってきたから
ちんぽ責めにもしばらく耐えられるはず!
やつが油断してこのキューブを大きく変形させた隙に
魔力を一気に解放して吹き飛ばしてやる!」

「このまま…おほおっ♡た、耐え…んおおおおおっ♡」

「どうした〜この程度の責めでなんだった？
突き出したちんぽから我慢汁垂れてきてるわよ♡
ぷふ、なんだか壊れて水が垂れちゃってる
蛇口みたいね♪」

「おおおおおおお♡(お、おかしい！
ちんぽいつもより感じる！
よ、よく考えたら何発出したか分からないぐらい射精して
性欲なんて欠片もなかったはずなのに勃起して…
まさか…魔術薬の効果が切れてきてその反動が…！)」



「おひひひひひひ！しゃ、射精止まらなひひひひひひ！」

「…ちよっ！あんただんだけ射精すんのよー！」

「しゃ、射精とまらなひひひひひひ！
ま、まさか魔術薬の副作用でっ！！
あひっ！おひひひひひひひひひひひひひひひひっ♡！」



ホッホッ

ウウ♡

ホッ

プウ♡

「あひっ~~~~~♡ほひっ~~~~~♡」



「とんでもない量出したわね…」

最初に射精したときはこんなバカみたいな量じゃなかったはず…
そういえば射精してる時に副作用って言うけど

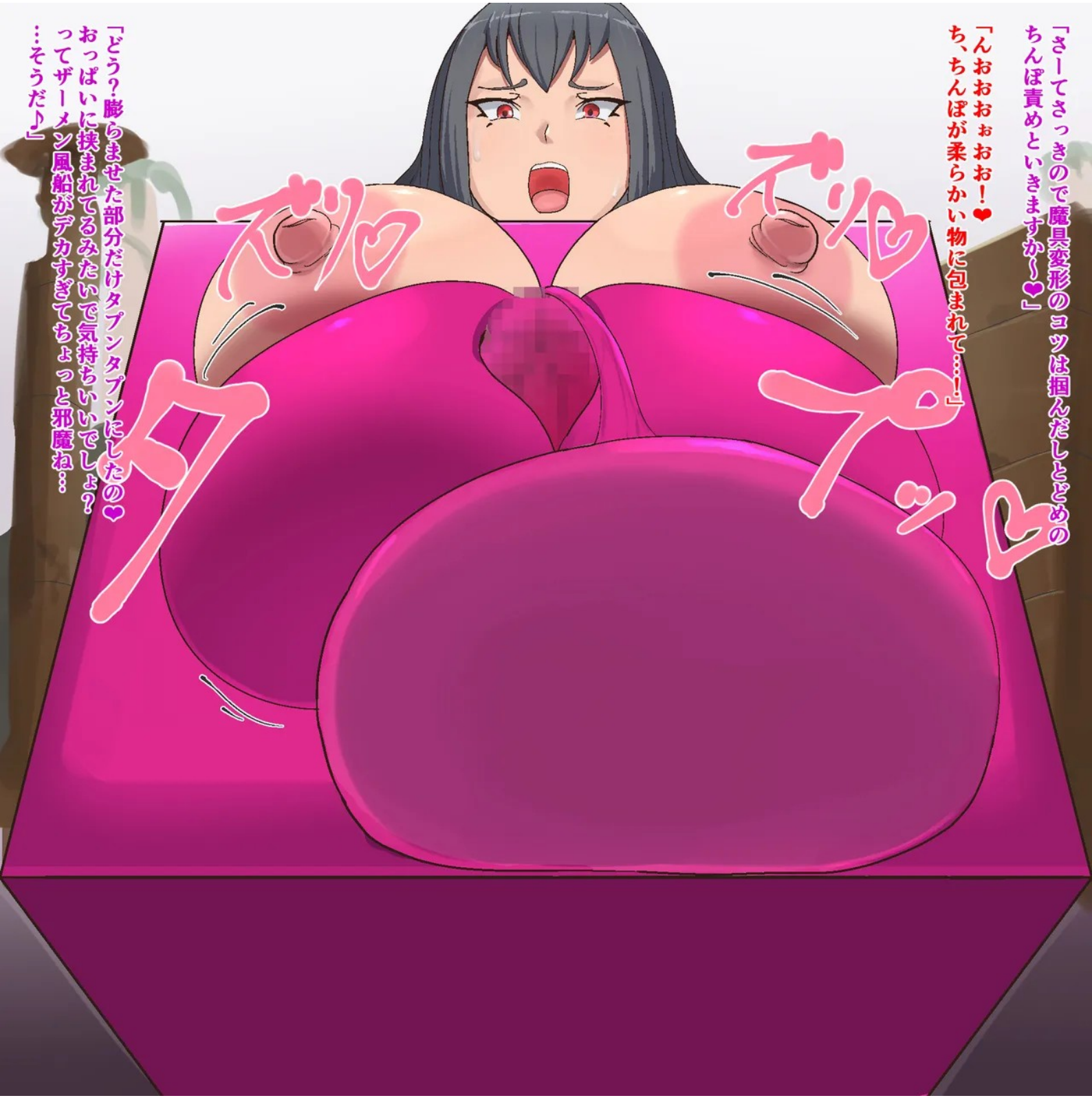
さては変な魔術薬か何かを使って戦えるようになってたのね
そんな特殊な薬作ってまでリベンジしてくるなんてね」

「ま…まずい…今の射精で…もうほとんど使える魔力が…」

「さーてさっきので魔具変形のヨツは挿んだしとどめの
ちんぽ責めといきますか〜♡」

「んおおおおお！♡
ち、ちんぽが柔らかい物に包まれて…!」

「どう？膨らませた部分だけタブンタブンにしたの♡
おっぱいに挟まれてるみたいで気持ちいいでしょ？
ってザーメン風船がデカすぎてちよっと邪魔ね…
…そうだ♪」

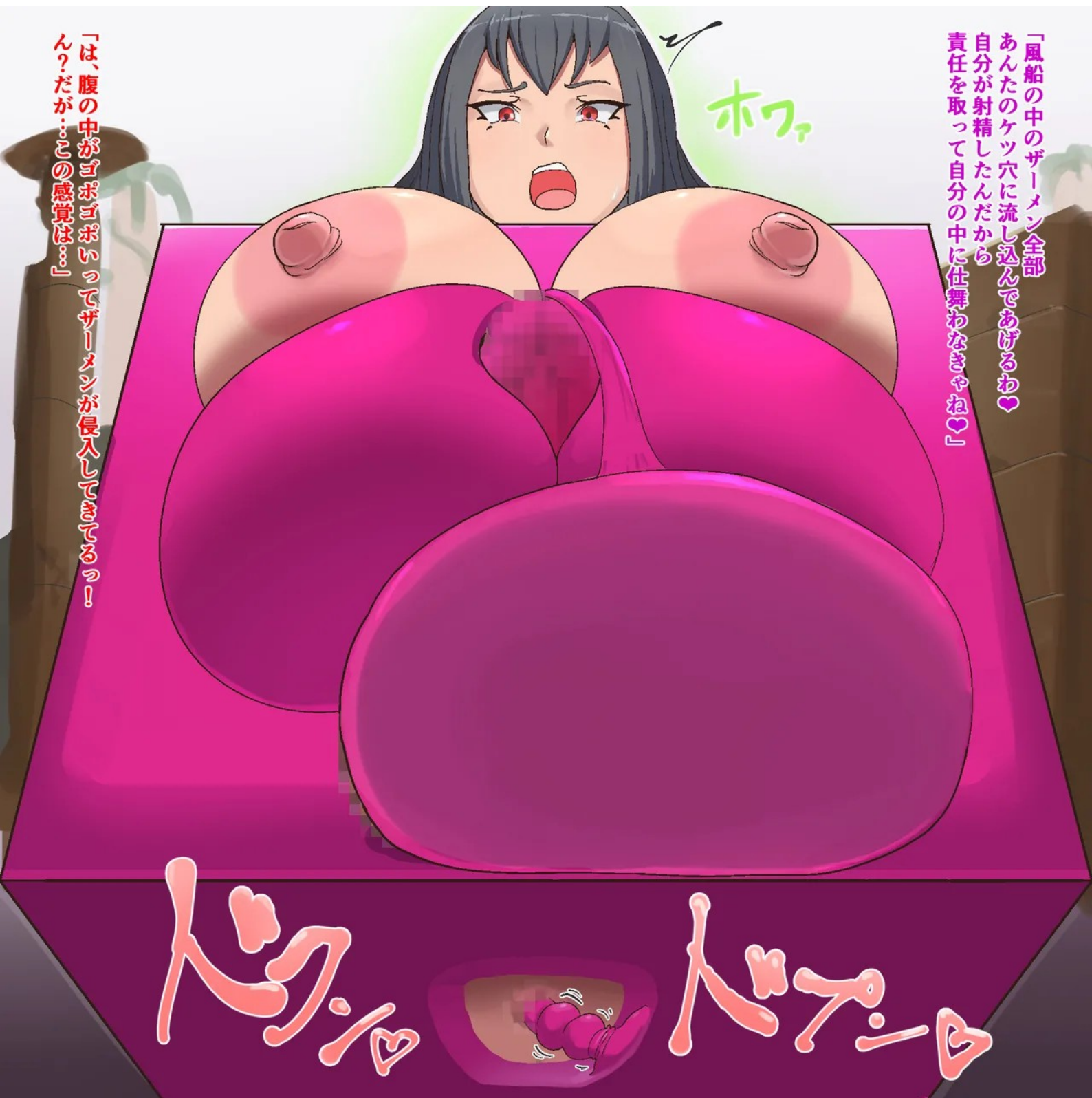


「風船の中のザーメン全部
あんたのケツ穴に流し込んであげるわ♡
自分が射精したんだから
責任を取って自分の中に仕舞わなきゃね♡」

ホワッ

「は、腹の中がゴボゴボいってザーメンが侵入してきてるっ！
ん？だが…この感覚は…」

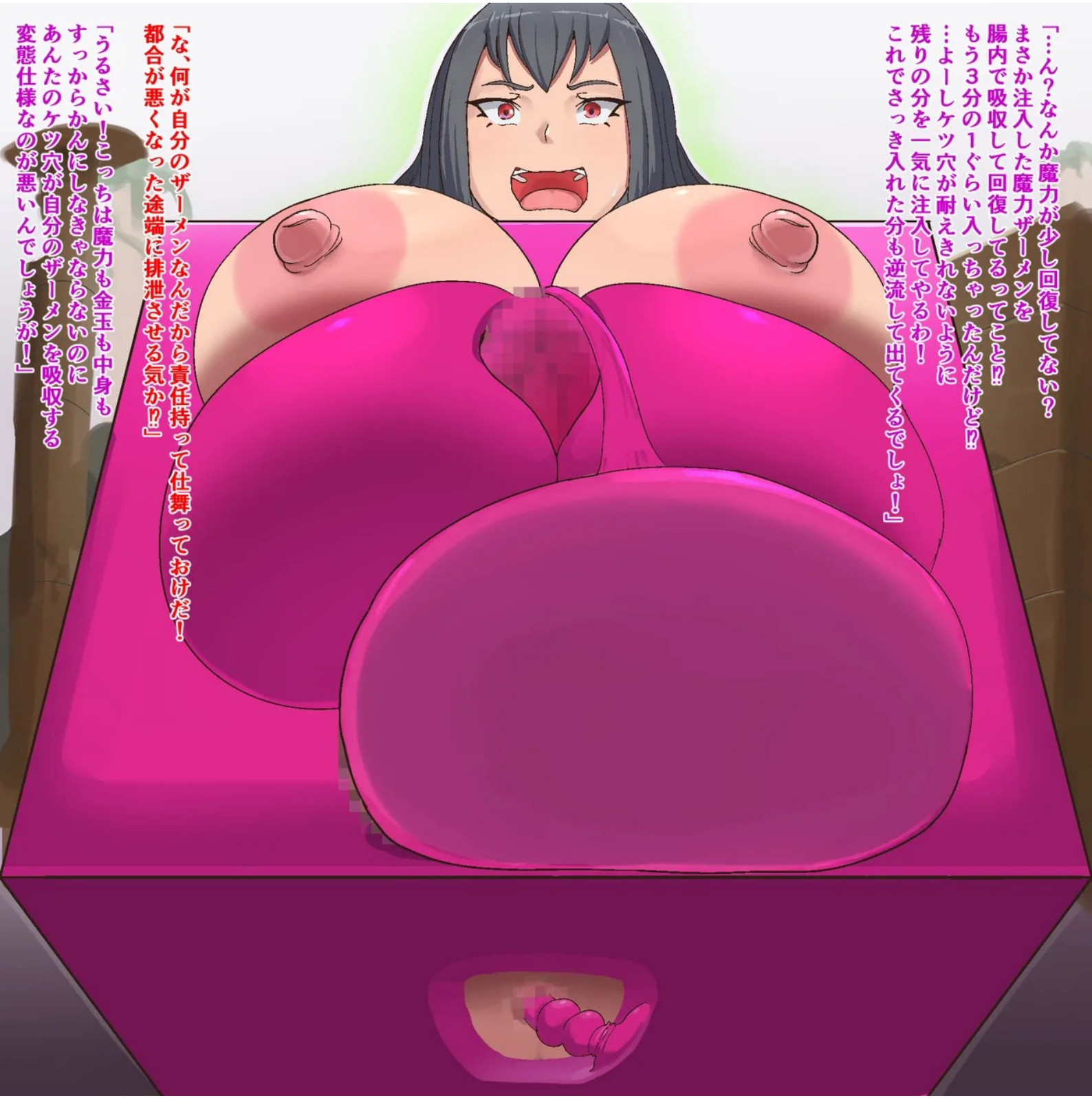
ゴボゴボ



「…ん？なんか魔力が少し回復してない？
まさか注入した魔力ザーマンを
腸内で吸収して回復してること？！
もう3分の1ぐらい入っちゃったんだけど？！
…よしケツ穴が耐えきれないように
残りの分を一気に注入してやるわ！
これでさっき入れた分も逆流して出てくるぞ！」

「な、何が自分のザーマンなんだから責任持って仕舞っておけだ！
都合が悪くなった途端に排泄させる気か？！」

「うるさい！こっちは魔力も金玉も中身も
すっからかんにしなきゃならないのに
あんたのケツ穴が自分のザーマンを吸収する
変態仕様なのが悪いんでしようが！」



「無駄な抵抗するな！ほおら、ケツ穴が頑張るところに
擬似パイズリも追加ー！♡ちんぼとアナルの同時責めで
ザーメンぶちまけろ！」

「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！
も、もう我慢無理っ！肛門ガード決壊する！
ちんぼ穴とケツ穴から精液噴き出してイグううううううー！♡」



「くっ…なんて強さ…!!」
「撤退!撤退よ!」

「あゝ…あゝ…あゝ…あゝ…」

「ふふーん魔具のスペシャリストである私が
No.1魔警の火涼ちゃんに
最適な魔力循環を計算した魔具鎧を装備させた
奴隷魔具戦士だからね!
そんじょそこの魔警じゃ相手にすらならないのよ!」



「ふむう…ふぐうー!」❤️

「なに、射精したいの?なるべく体内の魔力量減らさないように数日間射精させてなかったからな。ま、金玉に魔力が溜まりすぎても良くないしそろそろ出させてあげようかな❤�
今日は新たな魔具も手に入れて気分がいいから何か新しい方法で……………
…いいこと思いついたわ❤�
鎧を一旦解除するから気を付けの姿勢になりなさい❤�」

ビクッ

ビクッ



「はあ…はあ…♡こ、これでいいんだなっ！
早く射精させてくれっ！ちんぽがもう限界だ！♡」

「まーだ奴隷の自覚が足りてないようね
射精させてほしい時はどう言うんだっけ？」

ビーン♡

ビーン♡



「す、すみませんでしたっ!♥
ちんぽ奴隷の火涼!股間のザーメン袋がパンパンで
中の臭ミルクを排泄したいですっ♥ちんぽも一生懸命振って
アピールしますのでどうか射精許可をお願いしますっ♥
(こ、こんな情けない姿…魔警として最低なのに…
今はとにかく射精!射精したいいい!♥)」

「よくできました♥それじゃ
従順な肉竿付き女剣士の火涼ちゃんが
気持ちよく射精できるように
ご主人様が魔具を変形させてあげようかな♥」

ゴーン♥

ハッ♥

ズン♥

ヘッ♥



「魔具が全身に薄く広がってる…!ご、ご主人様これはいったい…」

「以前あなたのちんぽに膜を被せてザーメン受けにしたでしょ?それを今度は全身にピッタリ貼り付けてあんたをマネキン人形みたいにしちゃおうかなって♡」

なんにも見えない状態で全身を圧迫されながらちんぽ汁出させてあげる♡」

「くっ♡はあ…はあ…♡」

ズ

ワァ♡

「はい、ちんぽ女奴隷の密封完了〜♥
頭の先までピッタリ張り付いてるけど
火涼ちゃんが金玉で一生命濃縮した魔力が通ってるおかげで
そんなに息苦しくないでしょ?♥」

「ふう〜♥ふぐう♥むぐう♥」

「顔も覆われて誰だかわからない下品なちんぽ人形にされても
興奮してるみたいで結構結構♥それじゃ…」

シ

ピク♥
ピク♥

チツ♥



「むぐうっ♡うぐう!♡」

「ん?腰振りしだしちゃってもう射精なの?
まあ溜まってたみたいだし仕方ないか♡」

ちんぽの先まで

コーティングしてあるからそのまま射精して
お得意のザーメン風船作りしちゃいなさい♡」

「むふっ♡ふうっ♡うっ♡」

が
ム

ホ
ッ

ハ
ッ

が
ム

ハ
ッ

ハ
ッ

「んふううう~~~~~♡♡♡ふう~~~~~♡♡♡」

「これまた大量に射精したわね♡出す度に射精量が増えているのは魔具の力が身体に馴染んできたせいかしらね♡」

「さーてちんぽ女の射精処理も終わったし汚いザー汁を外に出すために風船に穴を開けて……」

♪

お
は
い♡

「むぐお!!」

「あっしまった!元のピッタリ型に戻しちゃった!」

「むおおおお!!♥むぐううううっ!♥」

「あちゃ〜これってもしかして
風船の中に入ってたザーメンが全身に
いきわたっちゃってるんじゃない?」

ビュ

チッ!



「むぐおおおおおつおお♡ふんごおおおおおおおおおおお
「あははははははは！自分の精液漬けになって興奮しすぎて射精しちゃってる!!」

「どんだけ変態なのよ火涼ちゃん!♡
働きの上にこんなになんて笑わせてくれるなんて最高のちんぽ奴隷ね♡」

ん

しゅ

ホ
ビ

ルルル♡

「ふう~~~~~ん♥ふう~~~~~ん♥」

「二発目の変態射精も終わったみたいだし
今度こそ全身の膜を剥がすわよ♥
さあてザーメンの中身どうなってるのかな〜♥」

ア

お
お
♡



「精液まみれの下変態ちんぽ女が登場〜…っとうわっ！
すんごいニオイ！♥」

「はへえ〜……………♥
はへえ〜……………♥
体中がくっつきさいちんぽミルクでヌチャヌチャになって……
全身ザーメンパック射精すぎりゅう……………♥」

「あちゃ〜こりゃド下品射精中毒になっちゃうかもね♥
まあちんぽのことで頭が一杯の方が従わせやすく助かるわ♥
これからもあたしの奴隷としてビシバシ働いてもらおうからね〜♥」
「はひい…♥」

ん

ロオ…
♡























































































































